

【海外の教育事情】

ハーバード・カレッジの心臓部 -ザ・ハウス・システムという学寮制度-

The Heart of Harvard College: Living and Learning in the House System

ハーバード大学学寮長補佐 清水 義教

SHIMIZU Yoshiyuki

(Harvard University Faculty Dean's Aide)

キーワード：学寮制度、リーダー育成、学部教養教育、ハーバード

大勢の、いかにも若者らしく鋭敏で、素直で、思いやりがあって、注意深い若者たちが集い、互いに自由に交わると、たとえ誰も教える者がいなくとも、必ず互いに学び合うようになるのです。あらゆる会話が一人一人にとって一連の講義となり、若者はひとりでに新しい思想や見解、新鮮な思索の材料、判断や行動の明確な原理を獲得するのです¹。

はじめに

100年前、ハーバード大学はドイツに学ぶことで研究大学として成長し、学生数は激増するが、偉大な学者を輩出できずにいた。貧富の差は拡大し、連帯感がなく、楽な科目を履修し、スポーツに熱狂し、教授陣には学生軽視の風潮もあった²。ライバル校イエール大学卒の慈善家は母校の改革への逡巡に痺れを切らし、ハーバード大学総長³に莫大な寄付を行い、米国で初めて英国オックスフォード大学型の学寮制度を学部教育の心臓部においた。既存のハーバード・カレッジとの混同を避けるため、College とは呼ばず House と名付け、Ryan (2001) は同カレッジの The House System について「近

¹ 大学論で著名なヘンリー・ニューマン(1801-90)。オックスフォード大学出身、アイルランドに創設されたカトリック大学の初代学長に就任。Newman, J. H. (1983). 大学で何を学ぶか (田中秀人, Trans.): 大修館書店。

² 清水畏三. (2011). 列伝風ハーバードの学長さんたち-成功者と失敗者: 私家版。

³ 便宜上、Harvard University を「ハーバード大学」、Harvard College (学部教育のみ) を「ハーバード・カレッジ」、President of Harvard University を「総長」、Dean of Harvard College を「学長」と表記する。

代的な大学の中に同僚的な⁴ 集合体を新たに創造し、それを通じて大学の理想と結びつけたアメリカ高等教育史上に残る一大事業である」⁵ と高く評価した。

当時の総長の悲痛の叫びから誕生した The House System 導入から 100 年が経ち、これまで 25 人の国家元首、49 人のノーベル賞授賞者を世に輩出した。今年もハーバード・カレッジは過去最高倍率(合格率 4.59%)⁷ を更新した。入学者の世帯年収が 65,000 ドル以下(学部生 2 割が対象)であれば 4 年間の授業料、寮費、食費⁸ は全額無料であり、全学部生の 5 割以上が部分的奨学金の受給対象者だ。現在、ハーバード大学史上、最も野心的な予算規模 14 億ドルの The House Renewal と呼ばれる 15



総額 14 億ドル House Renewal (改修工事)中の
Lowell House⁶

年越しの改修工事が進行中であり、キャンパス中心部には槌音が響いている。なぜこれほどまでに学部教育を重視するのか。プロフェッショナル・スクールで有名なケネディスクール、ビジネススクール、ロースクール、また大学の寄付金運用、組織及び重要人物の歴史、いわゆる「ハーバード流」のような書籍は一時話題になるが、ハーバード大学システムの淵源であるカレッジ心臓部の学寮制度や教員・研究者と学生の人間的交流について書かれたものはほとんどない。本稿執筆のもう 1 つの動機は、100 年前にハーバードが経験した研究重視、学生軽視の状況、貧富の格差拡大、連帯感の喪失、楽に卒業しようとする風潮は、日本の高等教育の現状と軌を一にするのではないか、と考えたことである。

11 年前、文部科学省「大学教育の国際化推進プログラム」のマネジャーとして、東京大学教職員対象に同カレッジで海外研修の企画運営に従事して以来、教職員及び学生と親交を深めてきた。昨年、ハーバード大学教育大学院国際教育政策修士課程を卒業し、現在はハーバード大学学寮長補佐として

⁴ college のラテン語の語源である collegium は「組合」、「団体」の意。原文は college の形容詞 collegiate を使用しており、「同僚同士仲の良い」という意味を含む。

⁵ Ryan, M. B. (2001). A Collegiate Way of Living: Residential Colleges and a Yale Education: Jonathan Edwards College, Yale University.

⁶ 筆者撮影

⁷ 出願者 42,749 人、合格者 1,962 人、入学者 1,661 人。

<https://www.thecrimson.com/article/2018/3/29/harvard-regular-admissions-2022/>

⁸ 2018 年 9 月現在、全額支払い対象世帯の場合は、4 年間の授業料、寮費、食費の総額は 320,056 ドル。<https://college.harvard.edu/financial-aid/how-aid-works/fact-sheet>

450人の学部生と寝食を共にしている。本稿では、ハーバード・カレッジの一世紀に渡る改革の中核組織である The House System に焦点を絞り、学寮制度導入に踏み切った歴史的経緯、大学の使命と学寮制度の役割、House 内部の構成メンバーの役割及び活動内容を明らかにすることを目的とする。

カレッジの中にカレッジ群 (House) を創る



アボット・ローレンス・ローウェル⁹

第22代ハーバード大学総長

(在任 1909-1933)

レジデンシャルカレッジの歴史は13世紀ヨーロッパ、特にパリ、オックスフォード、ケンブリッジの各大学に遡る。地方からの貧窮学生を受け入れるために設けられた制度で、当初の宿泊所の機能にとどまらず学生が昼間に習ったことを復習、議論できる場となり、学問の場として中心的存在となった¹⁰。

19世紀末、ハーバード大学は学生の激増¹¹に伴い、全米最大級の大学に成長していた。既存の寮で収容できる学生数は限界を超え、1884年には入寮義務を撤廃した。すると、ほとんどの学生がキャンパスを離れ、「ゴールドコースト」と呼ばれる富める学生が暮らす高級マンション通りが出現し、一方、貧窮学生は劣悪な環境で生活することになった。ローウェルの前任者エリオット総長は、ドイツ流の近代的ユニバーシティーをモデルにしてハーバードの大改革に成功したが、学部生が抱える

この問題を放置していた。1909年、ローウェルは総長就任後の公式発言で、「大学における人間形成は、その大学の規模如何と関係がある。規模が大きくなりすぎると、よろしくない。似たもの同士が徒党を組むようになるからだ…色んな中等学校や地方からきた連中を、貧富にも関係なくミックスさせる。それにより、学内の雰囲気は民主化される」¹²と、100年以上前にダイバーシティーの重要性を説いた。

19世紀、米国の学問水準はヨーロッパと比べはるかに低く、ドイツの大学が世界最高を誇り、ハーバード大学の卒業生もドイツに留学していた。一方、ハーバード・カレッジでは露骨な貧富の格差による連帯感の喪失に加え、エリオットが実施した自由選択制へのカリキュラム改革により、学生は楽な科目を選択するようになり、勉強から逃避していった。ローウェルはエリオットの自由選択制を次

⁹ 米国国立国会図書館所蔵写真。http://loc.gov/pictures/resource/ggbain.03503/

¹⁰ ジャック・ヴェルジュ。(1979). 中世の大学 (大高順雄, Trans.): みすず書房.

¹¹ 学部生数の推移。1869年563名, 1908年2,238名, 1919年2,534, 1935年3,726名。清水畏三。(2011). 列伝風ハーバードの学長さんたち—成功者と失敗者: 私家版.

¹² 同上.

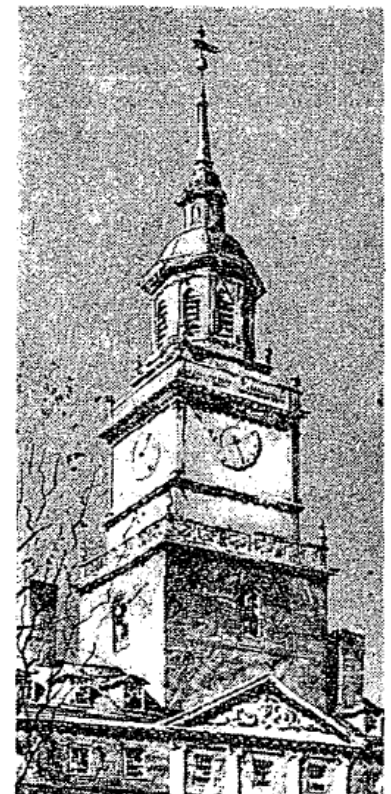
のように痛烈に批判した。

19世紀末、選択履修制のカリキュラムが導入され、学生数の激増に伴い、大多数の学生を学寮に收容する方針が放棄されるに至った。それはカレッジ生活が知的に社会的に解体される傾向を意味する…カレッジ学生の学習意欲が減退している。学問にあこがれない。学業優秀者になっても、学生仲間も世間も、さっぱり高く評価してくれないからだ。それに引き換え、スポーツの対抗試合に熱狂している…米国は偉大な学者や思想家をさっぱり輩出していない。6,000人以上の大学院生を抱えているにもかかわらず…それは優秀人材が適切に選別されていないからだ。カレッジという場においてのみ、優秀人材を発見、成長させることができる¹³。

20世紀に入ると、ドイツの大学に留学した米国学生の間で、ドイツの学問的な衰退、学問の自由を危惧する声が高まり、第一次世界大戦前にすでにフランス・イギリスと親密化していった¹⁵。そして米国高等教育のドイツ化（研究重視）を危惧する動きがプリンストン大学のウィルソンとハーバード大学のローウェルを中心に起こった。彼らは学部教育を蘇生する方法としてオックスブリッジ学寮の復活を提唱した。当時、オックスフォードで学んだローズ奨学生ジョン・コービン著の *An American at Oxford* という著書が学寮導入への議論に大きく拍車をかけた¹⁶。カレッジ時代に自らも兄弟らと寮生活を経験したローウェルの学寮制度実現への決意は固かった。

大学院にせよ、プロフェッショナル・スクールにせよ、カレッジ教育が根本である。カレッジ教育が成果を上げられるかどうかだ。カレッジにおいてこそ、人格形成、立志、市民教育が行われ、好学心が植え付けられるべきである…カレッジ教育の使命は2つ、学問と人格形成である。その人格形成に最も強く作用するのは学生仲間である。教師の力より、はる

A HARVARD "HOUSE"



The Tower of Lowell, One of the First Units Built to Carry Out the New Teaching Plan.

ニューヨーク・タイムズ紙に

掲載された House の落成¹⁴

¹³ 清水畏三. (2011). 列伝風ハーバードの学長さんたち—成功者と失敗者: 私家版.

¹⁴ ローウェル総長の名を冠した Lowell House の時計台. Lowell, A. L. (1933, January 15). A scholars' paradise. *New York Times*.

¹⁵ 清水畏三. (2011).

¹⁶ Duke, A. (1996). *Importing Oxbridge: English Residential Colleges and American Universities*: Yale University Press.

かに強い…その解決策のモデルとしては、英国流のカレッジ・システムがよろしい。それを米国に適用するなら、大型化したカレッジを、いくつかの生活グループ（学寮）に分割する。そしてそのグループの中で、色んな学生を混ぜて共同生活させる¹⁷。

ローウェルは1918年までにまず4つの初年次寮¹⁸を完成させ、貧窮学生への配慮も怠らず新入生全員の入寮を可能にした。1928年イェール大学卒の慈善家エドワード・ハークネスの当時の11,392,000ドルという莫大な寄付金により、1933年までに7つの学寮¹⁹を完成させ、正式にThe House Systemとして稼働した。Kerrはローウェルの改革は、ドイツ化した研究大学に対するイギリスの影響の再来であり、その源泉は古代ギリシャのプラトンにある²⁰と評価した。またローウェル自身、学寮制度導入を「最大の喜び/張り合い」と捉え、彼の在任24年間で「ハーバードは押しも押されぬ、米国最高のユニバーシティにのしあがった」²¹と自負している。この発言は決して過大評価ではなく、21世紀に入ってもハーバード大学の首脳陣は政治的・経済的危機に直面するたびに、ローウェルの学部教育の原点に立ち返る。371年のハーバード史上女性初の第28代総長に就任したドゥリュウ・ファウストは、リーマンショック直後、100年に1度のHouse Renewalのために、カレッジ史上最大級の14億ドルを投じる大胆な決断をした。

1904年、ローウェルは深く考える力のない卒業生を輩出する単なる“頭でっかち製造機”になることから米国教育機関を救う方策として、The House Systemの導入を呼びかけた…私たちはローウェルのヴィジョンを継承する義務がある。80年を経たThe House Systemという実験を継続し、更新し、活性化しなければならない²²。

¹⁷ 清水畏三. (2011).

¹⁸ 初年次寮は英語ではfreshman dormitory、最近ではfirst-year dormitoryと表記され、大学リソースに最も近い場所に新入生を居住させる目的から、The Yardと呼ばれるカレッジ中心部にあえて集中的に建設されている。本稿でテーマとするThe House Systemは初年次寮とThe Yardから少し離れた2~4年生が居住する学寮Houseの両方を含む。

¹⁹ Dunster, Lowell, Eliot, Winthrop, Leverett, Kirkland, Adamsの7つのHouseは歴代総長の名を冠している。

²⁰ Kerr, C. (1963). *The Uses of the University*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

²¹ 清水畏三. (2011). 列伝風ハーバードの学長さんたち—成功者と失敗者：私家版.

²² <https://news.harvard.edu/gazette/story/2008/12/renewing-a-venerable-experiment/>

ハーバード・カレッジの使命と The House System

本年母校で45年間務め上げ“Mr. Harvard”と惜しまれながら初年次学部長を退職したトーマス・ディングマンとのインタビューがいまでも印象に残る。1930年代のローウェルの学部教育大改革と同時期に、初年次学部は新生のコミュニティ形成を促進するために設置された。米国初年次教育の先駆けである。彼がある高3受験生のことを語ってくれた。出願書類も素晴らしく、SATスコアも満点だったが、その受験生を面接した時に不合格にしたとのことだった。その理由を一言、「彼は寮生活ができない。ハーバードは秀才を育てることに全く興味がないから。リーダーを育成したいんだ」と気さくに語った。また、7年前に学部生リーダーたちの意向で、初年次寮の入り口に「新生の誓い」というスローガンを自ら掲げたエピソードを紹介してくれた。その誓い文に、「私たちは知性を養うことと同時に、思いやりを持って相手に接する」との文言を表明したことは画期的な行動だった、とその時の感動を語った。



ハーバード史上初の女性総長

ドゥリユー・ファウスト²³

初年次寮の入り口に「新生の誓い」というスローガンを自ら掲げたエピソードを紹介してくれた。その誓い文に、「私たちは知性を養うことと同時に、思いやりを持って相手に接する」との文言を表明したことは画期的な行動だった、とその時の感動を語った。心温かき知性をどう育てるか、これを現在の最重要課題と考えているようだ。ハーバード・カレッジの使命は「教養教育に根差した変革力を通じて、社会に通用する市民リーダーを育成すること」²⁴であり、学部教育の全ての活動がこの一点に集中する。その心臓部に位置するのがHouseである。

ドイツとイギリスを調合したハーバードの学寮イノベーション

ハーバードの教職員でも The House System のことを“チュートリアル”と表現する人がいるが、これには誤解がある。ローウェルがオックスブリッジから輸入したものはTutor/Tutorial制度であるが、The House Systemはハーバード流に新しく発明したものだ。オックスブリッジのチュートリアルは同じ学寮に所属する教師と学生が1対1で、授業期間中毎週1回行い、毎週異なるテーマの課題を与え、必読文献も指示される。学生は指定された課題についての膨大な量の文献を読みこなし、批判的な視点からテーマを論じた1,000語ほどのエッセイを書き、次のチュートリアルで発表する²⁵。オックスブリッジでは授業の一環であるが、ハーバードではHouse内で教師に学習評価を受けることはない。まず授業はHouseから外に出たキャンパスの教室であるし、仮に、ある学生が週1回の大規

²³ <https://www.youtube.com/watch?v=rcAJHiL2u7s>

²⁴ <https://college.harvard.edu/about/mission-and-vision>

²⁵ 富田裕子。(2012). 英国の大学教育の現状と課題. 成城大学共通教育論集(5), 51-74.

模講義とセクションと呼ばれる小単位に分けた授業を履修し、同じ House 在住の大学院生の Tutor がその小グループを担当する偶然はあり得るが、同じ House に夕方戻って、授業内容をオックスブリッジのように House 内で試験されることはない。しかし、食堂でインフォーマルに授業内容を復習することは大歓迎だ。否、そのために House はあると言っても過言ではない。

米国高等教育で tutorial という単語を発する時、前述の“同僚同士仲の良い”を意味する collegiate のような柔らかい意味で用いている。日本語の“生徒指導”“ガイダンス”のような強い表現は避けたい。その代わりにハーバードでは advising がよく使われる。collegium は同じギルドを意味するのであるから、肩書きは Dr. と Mr./Ms. と表記は違っても 1 つ屋根の下で同じ釜の飯を食う集団である。

The House System 学部生の満足度

ハーバード・カレッジは特別な理由がない限り全寮制をとっており、98%の学部生が House に住んでいる。現在進行中の House 大改修工事の計画段階の 2008 年、全学部生を対象に調査²⁶を実施した。5段階評価で学寮生活全般の満足度は、自習及びグループ学習環境 4.1、知的刺激 4.0、食事 4.3、居住環境 4.1、寮内交流及び企画 4.1 と全ての項目で 4 を超えていた。

しかし、同世代だけで自由奔放に生活したいのが若者ではないか。教授や博士課程の多くの大人と同居するのは窮屈ではないか。上からのアドバイスなど余計なお世話ではないか、との質問を学部生に投げかけた教授がいた。ハーバード大学教育大学院のリチャード・ライト教授は 1986 年、当時のデレック・ボック総長からの直接の要請で、25 大学、65 名の教授と共に 10 年越しの定性調査プロジェクトを率いた。その結果をまとめた本²⁷は“ハーバード大学出版会”98 年の歴史上売上げトップ²⁸に入り、学生向けに読みやすく書かれているが、全米の多くの高等教育関係者に課題図書としても読まれている。Newsweek 誌の取材²⁹を受けてライト教授は、一番驚いたのは 7 割強もの学部生が「アドバイスが欲しい。履修科目の選び方が知りたい。課外活動とのバランスもあるから」と回答している。

²⁶ 回収率 30.7%、1,497 人の学部生が回答。5 段階評価の内、5.0 が満足度最高値。

House Program Planning Committee. (2009). Report on Harvard House Renewal. Harvard University.

²⁷ Light, R. J. (2001). *Making the Most of College: Students Speak Their Minds*. Harvard University Press.

²⁸ <https://bokcenter.harvard.edu/people/richard-j-light>

²⁹ Davis, A. (2001, June 11). How to Ace College: an interview with Richard J. Light. *Newsweek*, 11.



Cabot House の Faculty Dean(学寮長)も務める

クラナ学長夫妻³⁰

ローウェル退任後、次期総長に就任した。

2015年就任したハーバード・カレッジのラケシュ・クラナ学長は、2010年以来現在に至るまでクラナ夫人³⁴と2人でCabot Houseの学寮長を務め、子供3人と一家で暮らしている。日中キャンパスで授業を受けて帰宅すると、学長及び学長の家族が同じ食堂で夕食をとっている、時には向こうから声をかけられたりする。また、クラナ学長の就任が決定するまで、ドナルド・フィスター教授がカレッジの暫定学長を務めたが、夫人と共にKirkland Houseで18年間学寮長を務めたハーバードの重鎮である。教授はいくら研究業績があっても、学生を教えられるか、否、彼らから学ぶことができるか、共に同じ釜の飯を食べられるか、共に喜怒哀楽を共有できるか、彼らから信頼を勝ち取れるか、これらの指標でハーバード・カレッジの最高幹部は選抜されている。

ケネディー、パースタイン、皇太子妃雅子さまも

イエール大学卒の慈善家ハークネスが学寮建設のため、寄付の話をローウェルに持ちかけて、今秋でちょうど90年である。Houseごとに独特の図柄が描かれている旗がなびくエクステリアを見ると映画『ハリー・ポッター』のホグワーツを連想する。米国の重要文化財に指定されている英国ジョージ王朝様式の贅沢なHouseから、これまで数々の著名人を輩出してきた。外観に目を奪われる観光客は気づかない、collegiateな、無形の文化財が息づいているのか。

³⁰ <https://harvardmagazine.com/2014/01/harvard-college-dean-rakesh-khurana>

³¹ 当時、学寮長に続く2番目のポジション。

³² 世界最古の国際的フェロシップ制度、アメリカで最も権威のある奨学制度の1つ。

³³ Duke, A. (1996). *Importing Oxbridge: English residential colleges and American universities*: Yale University Press.

³⁴ <https://cabot.harvard.edu/people>

学部生 98%が入居する 4 年間全寮制の The House System は、大きく分けると 2 層構造になっている。高大接続の意味で重要な初年次寮と 2~4 学年の上級生寮 House に分かれているが、初年次寮も含めて The House System と呼ぶ。初年次寮は 17 の建物から構成されるが、4 つのグループにまとめられ、4 人の Resident Dean が責任者として管理している。一方、初年次を終了すると全員が 12 の House のいずれかに引越しし、生活上問題がなければ同じ House で卒業まで過ごす。House ごとに Faculty Dean の 2 人（主に夫婦）が約 350~500 人の上級生及び Tutor を含む多様な関係者の責任を負い、全ての House の収容人数合計は 6,500 人だ。



1940 年卒業したケネディー元大統領が暮らした Winthrop House の部屋^{35 36}

誰も置き去りにしない重層的、多面的なアドバイジングの網の目

ローウェルが目指した「カレッジの中のカレッジ群を創る」との意味は、巨大化した組織の中に、無数の意味のある、個人的なつながりを創造できるかという挑戦であった。下記の図は、ハーバード大学が前述したカレッジの使命を果たすために、The House System の中で中心的な役割を担う人物をまとめたものだ。高校から大学へと劇的に環境が変わる初年次の体験が、残りの 3 年間を決定づける³⁷ との信念に基づいて、初年次学部が 1930 年代のローウェル大改革時代に既に誕生している。図の円が 1 年生から 4 年生にかけて年々大きくなるのは、学年が上がり住む場所が変わっても、出会った先輩との思い出や触発は決して消えないからだ。4 年生になっても 1 年次の時の先輩に相談できればその先輩はどれほど嬉しいだろうか。

³⁵ <https://news.harvard.edu/gazette/story/2011/10/a-room-fit-for-a-president/> (左)

³⁶ <https://news.harvard.edu/gazette/story/2017/01/the-return-of-winthrop-house/> (右)

³⁷ Harvard University (2007). *Report of the First-Year Experience Planning Committee Prepared for the Dean of Harvard College.*



カレッジ中心部の地図。赤い建物が初年次寮³⁸



カレッジ中心部から歩いて15分圏内の12のHouse群³⁹

³⁸ 以下のURLの地図上の赤い寮の部分をクリックすると、その寮の解説及び寮内の設備の写真が見られる。<http://www.hcs.harvard.edu/~trishin/sergey/galleries/2004/froshdorms/>

³⁹ <https://map.harvard.edu/pdf/8.5x11%20campus%20map.pdf>



ハーバード・カレッジの The House System のアドバイジングを担当する

主な構成メンバー⁴⁰

初年次アドバイジング（初年次寮）

Proctor⁴¹ は主に院生（修士以上・ハーバード出身者が多い）で、1年生の25~30人を担当する。同じ寮に住み、学業、生活全般をサポートし、PAFも管理する。年間寮費・食費⁴²が免除される。**Peer Advising Fellow [PAF]**は Houseに住む上級生で、初年次寮を担当し、初年次寮まで足を運んで**Proctor**と共にイベントを企画運営する。週1回のスポーツ、映画鑑賞、週末の遠足等、ストレス発散や授業外の仲間作りを担当する。年間報酬1,000ドルが支給される。**Academic Adviser**（教職員/**Proctor**兼

⁴⁰ 筆者作成

⁴¹ Proctor (初年次寮)/Tutor (House)、役職名は違うが勤務・居住場所が違うだけで役割はほぼ同じである。日本ではTutorを“家庭教師”と訳すことがあるがここでは意味合いが違う。各Houseは毎年選抜で、リベラルアーツ・カレッジとして専門分野を文理にバランスよく振り分け、毎年20人以上のTutorを雇用している。12のHouseがあるので、200人以上雇用している。Tutorは修士課程以上で、博士課程在籍者、ポスドクもかなり多い。ほとんどが学部時代ハーバード・カレッジ出身であるが、それ以外はスタンフォード、コーネル等、トップ大学からしか採用していない。他大学からくる場合は、必ずハーバードの大学院等の組織に在籍する必要がある。カレッジのあるケンブリッジ市は家賃が非常に高く、寮費と食費が免除されるだけで年間200~300万円以上の価値はある。

⁴² 2018年度の年間寮費は10,609ドル、食費は6,551ドル。<https://osl.fas.harvard.edu/fees>

任の場合も)は3~6人の1年生を担当し、各学期の冒頭、履修科目⁴³を承認する。**Resident Dean** (博士卒以上・ハーバード出身者が多い)は同じ寮に住み、1年生約400人の学業・生活全般の最終責任者である。初年次アドバイジングの目的は大学内リソースへの案内役、履修方法・必須科目確認、交流イベントの企画運営、各自の専攻分野選択⁴⁴へのサポートである。

2年次アドバイジング (House)

初年次アドバイジングとの大きな違いは、向こう3年間居住するHouseへの引っ越し及び順応へのサポートである。Houseにおける最も身近な存在で、学生に対する中心的な役割を担うのは**Tutor**である。修士以上のハーバードの院生で、全員専門性を持ち、教授のアシスタントを務める院生もいる。同カレッジ上がりの院生がほとんどなので、学内リソース案内役にはこれ以上の人材はいない。**Proctor**と同じく寮費・食費が免除される。2年次アドバイジングの重要なポイントは2年次前期終了前の専攻選択へのサポートである。科目選択、専攻選択への計画、House外での専攻学部所属の**Concentration Adviser**との橋渡し、専攻内の必須科目の確認、研究活動・海外留学、奨学金等のリソースの紹介など、サポート範囲も**Proctor**と同じく25~30人である。専攻選択後は、**Concentration Adviser**が専攻内でのアドバイジングを担当する。同居する上級生2~300人は既に専攻を決定しているので、情報交換は容易である。

Houseの最高責任者は**Faculty Dean**(学寮長、教授・学長クラス)である。夫婦2人で担当するケースが多く、月1回の**Tutor**ミーティング/研修を実施する。ResidenceというHouse内の非常に広いスペースに住み、定期的にフォーマルディナー、音楽会などを学生との交流のために開催している。**Resident Dean**の役割は初年次寮と同じである。

3~4年次アドバイジング (House)

2年次アドバイジングとの違いは学部生の卒業後のキャリアへの意識の高まりに対するサポートである。**Pre-professional Tutor**は、医学部志望、ロースクール志望、ビジネス志望の3つの大きな柱があるが、**Tutor**に関する満足度調査の結果⁴⁵では、彼らのアドバイジングへの満足度が最も高い。学部生からすれば自分が目指すハーバード等のメディカルスクール、ロースクール、ビジネススクー

⁴³ 新生は2,000科目から選択することになる。許可を得て大学院の科目を加える5,000科目から選択できる。贅沢だが高校の既存カリキュラムからの変化に対応する新生サポートを重視している。

⁴⁴ ハーバード・カレッジでは49ある専攻**Concentration**(他大学のmajorに相当)の中から出願時に決定する必要はなく、入学後の2年生前期終了前までにminorに相当する**Secondary**と共に選択することになっている。専攻によって履修科目数も変わってくるので、初年次のアドアイスは慎重を要する。

⁴⁵ House Program Planning Committee. (2009). Report on Harvard House Renewal. Harvard University.

ルに現在通っている先輩たちと気軽に食堂で、ラウンジで話せる。志望動機書の書き方、GRE /GMAT 受験対策、推薦状の準備、面接の攻略法、教授の評判、Tutor を通して教授・ポスドク・在学生を紹介してもらうことも可能だ。食堂で会えなくても、各 House が管理するホームページで各 Tutor の専門分野・研究関心などを公開しており、直接 Tutor にメールを出してアポをとってアドバイジングが自由に受けられる。OB/OG 訪問をする必要はない。1つ屋根の下である。Tutor としても母校の優秀な人材を入れたい。同じ House 出身であれば家族のような強い絆がある。academic inbreeding と批判されるかもしれないが、The House System への莫大な投資へのリターンとも言える。

その他、Specialty Tutor は心理学専攻・カウンセラーの経験がある院生・専門家などが学部生のメンタルヘルス、性的マイノリティ、セクハラ・性的暴行/虐待、人種差別に関するサポートを担当している。差別を受けている学生、被害学生等が直接の連絡を躊躇する場合も多いので、Specialty Tutor は学部生との信頼構築のために気軽に話ができるイベントを定期的開催している。

上記の教員・研究者と学部生との交流の他にも、部屋の割当・変更手続き、House 内の予算管理を担当する House Administrator、学籍管理や Resident Dean の秘書的役割を果たす Academic Coordinator、施設管理の責任者は Building Manager、食堂運営の責任者は Dining Hall Manager、House 内にはハーバード大学警察の独自の交番もあり、警察又は警備員が常駐している。



ハーバード大学警察

House には交番も設置されている

おわりに

所属する教育機関における様々な課題を背負って、遠方からハーバード大学に視察に来られる方が多く、私も関心があるのでお話を伺いながら有意義な意見交換をさせて頂くことがある。「ハーバードには莫大な寄付金があっただけいいですね」と会話を終えられることが時折あるが、いつもリサーチクエスチョンを頂いたかのごとく一人思索してみる。お金があるからできるのか。米国の教育関係者が mission and money という表現をよく使い、決して money and mission の順番ではないと言う。ローウェルには長年温めた偉大な哲学があった。ボックが、ライトが、ディングマンが、クラナが、ファウストが続くだけのものがそこにあった。ハークネスも彼に富を託した。ヨーロッパに勝てず、アメリカに偉大な学者がいないことを悔しがったローウェル、いまの日本の高等教育の現状に何か語りかけてくるように思えてならない。ご感想など頂ければ幸いです。 yoshiyuki_shimizu@fas.harvard.edu